慶長大震と瓜生島の陥没

慶長元年閏7月12日（西暦1596年9月4日今より355年前）豊後地大に震い、府内近傍は津波の襲う所となり、瓜生島の大部沈下して海水に被われ、死者708名（他書には807名とあり、正否不明）を生ず、薩摩も地震強く、京都も又震えり（日本地震史料）

この地震は日本の太平洋側に横たわる外側地震帯の活動により、その地震帯の一部すなわち別府湾南東部に発生した海底地震によつて大分県東部に強震を感じ、別府湾に押寄せた地震津波で遂に大分市北東方に在つた瓜生島が陥没したと言う。別府湾にとっては重要な大地変の記録であるが、以下種々の文献より取捨して参考とした。

（1）今村明垣博士註（地震機構と津波発生の推考）

慶長元年丙申7月（後陽成天皇紀元2256年）南日本の外帯太平洋沿岸に大地震ありき。その震央地方の中心点は紀州土佐間の南海中でありて、震央線は西は大隅東方の海中より北東の方向に遠江の沖合に至る一線なりき。本邦の地震史上の旧記録によりて察すれば、この激震区域

は日本西部の軸線に並行して東、北東より西、南西の方向には約200里の長距離に亘れるにかかわらず、北、中国の方には余り延長せさりしことはその震源帯の西部日本の軸線に並行せることと、本邦を構成する地質が大体その軸線に並行して震波のそれを横ぎりて伝播することを難からしめたるに起因したるなるべし。土佐にては激震後1~2時間を経て大津波襲来し、津浪の時間は12時間余に亘り、その津波往復の振動週期は約1時間ないし2時30分間なりき。さて津波は南太平洋沿岸を襲いしのみならず、余勢は紀淡海峡より大阪湾及び播磨に達し、大阪川口は非常の災害を生じ、又一方は豊豫海峡を荒らし、余波は伊豫の西北岸及び長門、周防の海岸に達したると見えたり。土佐にては第三回目の大波は七八丈の高さに達したり。我豊後湾の海岸地方にても激震ありて、後約2時30分間以上を経て海水いったん遙か沖合に引き退き、海岸の干潟になりしこと数里、かくて約1時間半の後、高さ数丈の大津波来りしことは次の旧記にても知らるべし。

かくの如きは、これ海底地訖地震の定則にして、近くは明治29年三陸地震津波にても明かなり。この地震と津波とが同時に起らずして津波の地震に遅るること1~2時間の余裕あることは学理上極めて明白なる理由のあるありてこの時間の差異あるは震地地方の人民に、裕に津波を避難し得る時間を与えられる不幸中の天賦なりと謂うべきか。

これ当時我が瓜生島漁民及び勢家西大分地方の人々にして割合に溺死者の少数なるを見ても知るべきなり。

ここに又瓜生島の陥没に就ては、すなわち我豊後湾は、南日本中央軸線の北に並行せる地溝帯の陥没区域に当れり。この地溝帯の裂きよに沿いて第3紀（地質時代）の噴出をなしたるは、すなわち阿蘇火山脈にして湾頭に聳立する鶴見、由布の峻岳はこの地溝帯中に噴起したる山塊なりとす。かゝる地質上の関係ある豊後湾深海部の南の縁に露出し、しかも粗鬆にして固かりざる洪積層によりて成りしと思わるる瓜生島が、一朝西部日本の軸線に並行せる大地震に遭遇して地盤をすべらし、しかも大津波に洗われ海底に散乱し潮流に運ばれつくして痕跡もなく消え失せし理由は、地震学者の概ね一致する瓜生島陥没説にして、敢えて鬼神の説を要せずして充分なりとす。

（2）大分の震災状況と瓜生島陥没の様相

府内（主に今の大分市を指す）においては、元年7月12日未上刻（午後1時頃にして或は申の刻即ち4時とも称せり）百雷の一時に落つるが如き鳴動、南方と覚しき処より響き渡るとともに大地震起り、建築物を破壊し土地に裂け目を生じ諸処山崩れありたれども、須叟にして止みたればやや安堵せしが、同日酉上刻頃（5時ごろにして或いは申の刻とも言えり）

に海水大に鳴動せり、すわ津波の前兆なりと誰叫ぶとなく一般に伝搬し又種々の迷説起り府民再び驚愕して、取るものも取りあえず東西に走り、南に馳せ山野にのがる。

特に海岸の住民は勢家町の地比較的高きを以てここに避難するもの多く、瓜生島の漁民も早舟にて漕ぎつけ来たり又勢家に一禅寺の法藏寺（今の県立徒弟学校の敷地内）と称するがありて、その境内にも群集したり。暫らくして河川、井戸等の水はもとより時ならぬに海水遠く沖に退き干潟となること数里の遠きに達し、瓜生島との間は徒歩し得るに至りしが、半時ばかりにして忽ち山のごとき怒涛漲り起り、瓜生島を一なめにして進んで府内の平野を襲いぬ。

かくの如きものの一落一漲正しく週期をくり返し夜に入りて止みたり。雉城雑誌に言う「（前略）府中及商家近里の民悉く流没す。独り同慈寺（後の浄安寺）の薬師堂一字き然として存在す。又奇とすべし、その余の佛殿堂宇（府内の各社寺を指すか）傾斜す。古老の話に、この時濤當寺（同慈寺）菅神廟流失所在を知らず。又その大殿（本堂のこと）の前に旅船十隻10反帆漂着す。大豆を積むこと半ばにして人なし。且長浜大明神流失す。この時瓜生島も同時に沈没す。死を免るるもの僅かに7分溺死708人、或説には死を免るるもの50余人溺死700人と言えり云々」

この時領主早川長敏は、助命のため島民に衣服及米錢を扶加し、勢家の地に假小屋を立てて罹災民救助につとめたりと。

諸種の聞書、旧記、古老の物語を記録したるものなどを綜合すれば、瓜生島の陥没は事実にしてすなわちもと大分県の北豊後湾内に横たわりし一孤島にして東西の長さ約1里余南北20町、周囲3里余を有し、数百個の人家及三四の神社佛閣ありたるなり。古昔これを跡部島と称す。こは上古大己貴命、少彦名命と共にこの島に漁し給いたる神跡ありたるを以てこの稱ありと。

上記鈔訳の記する所によれば、鸕鷀草不合尊より以下73代の間代々の天皇、皇国巡視の時、日向高千穂の大宮、豊国直入の新宮より出御して、この島沖より御船に乗らせ給いしと。思うに上世の事遼邈その実を明かにすること難しといえども、96代御醍醐天皇の御宇、建武2年足利尊氏叛をはかり新田義貞のために敗れて西海に走るや当時舟を瓜生島惠悦崎（附図参照）に寄せたることを史上にのせたり。

雉城雜誌に曰く、この島一名沖の浜とも言えり。東西36町南北に21町余、街巷三筋東西に開き南を本町中筋を裏町北を新町と号し、家数凡そ千余軒島中威徳寺、住吉、菅神、蛭子（島の東部）及び島津勝久の居館などありこの地旧府の海口にして諸州の舟舶日夜輻するの大港なり。又言う。天正14年長曾部元親戦争利あらず府内に退き、この日沖の浜

より舟に乗り伊豫の日振ヶ島に帰る言々。又古老の伝説に陥没当日のことを言うに島の西（菊南言う東か）の方に祭る蛭子神の面の赤くなる時は、この島漂没すと。この日或る無頼の悪少年ありて面に丹朱を塗り、たわむれ欺かんとす。果たして島民大に怪しみ水害を避けんと欲し東西に奔走す。故に溺死するもの他に比して多からざりきと、時に領主早川氏は島民に衣服及米錢を与え勢家に假屋を設けこの所に移り住ましむ。故に旧名に因んでそこを沖の浜町と号せり云々。

茲に瓜生島陥没前の地名の一として附記すべきは所謂菡萑湾なる稱呼なり。世人往々今日の公称湾名たる別府湾（豊後湾は公稱地名にあらず）全域を以てやがて菡萑湾と思惟するはこれ僻事にして、その湾の限定区域に就ては編者もまた鶴谷外史の考證に賛同するものなり。氏はその著豊後史蹟考に論じて曰く、菡萑湾とは今の蓑崎、関崎より以西の内海を指して、呼べるが如くに思うもの多けれど決して然るにあらず。菡萑湾とは瓜生島と神宮寺浦との間にありたる一部分の名称に過ぎざりしなり。決して豊後湾若しくは別府湾など言うが如く内海全部を言いしにはあらず。菡萑の稱呼は元、明の阮林なる著が下せし由にて国志に記す所次の如し。「天文中、明人阮林著、航海來寓曰杵 屢遊覽干此地 終因其形状目爲菡萑海云々」と。然らば阮林が菡萑なる稱呼を下せしは、瓜生島の未だ陥没せざる以前（菊南言う約55年以前）なり。而して、瓜生島の図中にも菡萑湾とて前述せる如く瓜生島と神宮寺浦との間に

菡萏湾を載せたり。又三浦梅園翁の豊後事蹟考中、住吉社のことを記す條に6月の秬会（みなづきのはらえ）には神輿を小舟に乗せ奉り、12人の神楽男、管絃を奏し8人の舞姫袂をひるがえし、邯鄲（菡萏）の港を漕ぎ廻る「しはつ山こき出て見れば」と詠める鄙ぶりは是なり云々、と見えたり。神輿を乗せたる舟が周圀20里もありぬべき湾内を漕ぎ廻るとは思われず、邯鄲の港と言えるは即ち神宮寺浦の附近にありし事知るべきなり言々。

速水郡史

慶長元年7月大地震あり。扇山滑りて別府湾に突出す。海水溢れ瓜生島ために崩潰して海底に漂没す。同島は大分郡の海岸を距る19町の所に在り。東西一里、南北20町、戸数1,000余戸、一町12個村ありしが、この災により、没滅して死者800余人を出せり。

豊後遺事

慶長元年秋7月12日地震、海水溢れ沿海の地尽くその災害を蒙る。瓜生島また沈没す。瓜生島は大分郡に属し同郡北の海中にあり。東西1里、南北20町余、速水郡を距る19町、居民1,000余戸、人口5,000余あり。この災により死者807人、初め早川長敏の府内に来る

や茅屋を沖の浜に構え、瓜生島の余民を置き衣食を散与し、島民頼り以て生を得。

瓜生島の凶附記（大分町 幸松謙治氏旧藏）

慶長元年7月3日地震、同16日17日地震又23日より28日迄地震、動くこと大小1日に5度より10度に至る云々。46人立退きて荏隈に假小屋を建つる。云々。かくてその月も過ぎて閏7月になり4日5日地震、右につきこれ迄恐怖して逃退する者多し。然るに閏7月11日12日に至り未刻より大震小震数を知らず。この時に当つて豊後国總て大地震にて山崩、川溢れて高崎山、木綿山、鶴見山、靈仙寺山頭、巨石悉く落ちその石互に磨れて出火するなど天災在りし由、殊に瓜生島も格別の大地震にて島人恐怖すると言え共12日申の刻に至り地震暫らく止み近辺近里の人民大に喜び安心して浴びる者あり、食する者在り、食せざる者あり、時に海中大に鳴りひびく。諸人甚だしく驚き奇異の思いをなし東西に奔走して又々島民恐怖するに大地震となり言々。老若男女泣きさけんで各小舟に乗るもあり又は海を渡り逃げるもあり。この時村中の井戸悉く尽き海中潮の干事常ならず。海底五尋の岩砂現れ汐干なり。然るに海底大に鳴響百雷落つるが如し。洪濤忽ち起り来て洋溢れ府内近辺の邑里大波至る。海上を見渡せば瓜生島12村只一面の海上となり瓜生島の姿なし云々。

豊陽故事談

106代後陽成天皇の御宇、慶長元年閏7月大地震のため泉泓悉く潰廃す。同2年7月又地震海嘯のため久光島陥没し温泉薬師堂皆その所在を失す。

佐賀関史（第17編 地震と海嘯）

天災、地変、疾癘の三つのものは是また叙述せざるべからざるものであるが、その慶長以後に属するものを概観すれば、

慶長丙申年閏7月12日地震、海嘯大に至り関神社の鳥居倒れ、海水社殿を侵し崖岸は崩壊し、家屋は倒潰し関より大在に至る間田畑及び塩田の流没60余町歩に及んだのであつた。この年の地震は所謂「地震加藤」の名によって京阪伏見等の大惨状を想起せしむるものであるが、殆んど全国に亘つたものであつた。豊後に於ては菡萏湾口に横たわる長さ1里、南北20町周囲3里の瓜生島が陥没したのも同日であつた。臼杵の市中又海嘯に浸されて名状すべからざる惨害にかかった。

宝永四年亥10月4日また地震嘯あり。人民海嘯を避け高丘に避難し漁船顛覆して死者53人に及んだ。家屋の倒壊は数うるに遑まない。

本邦大地震概表 大森房吉著抜粋

豊後国、地大に震い八幡村柞原八幡社の拝殿諸宋社悉く倒る。また津波起つて府中並に近辺の邑里水に覆われ、神社佛閣民家多く流失す。附近の瓜生島は東西を縦とし三筋の町ありしが、地震のため水中に低落して人民の死せるもの807人に及べり。案ずるに旧記に瓜生島陥没して海となれりとあるも勿論同島が数十尋の深き海底に沈みるたるにはあらず。陥没とは誇張に過ぎたり。元来築堤の類が、強き地震の為に振揺せらるる結果10余尺も低下するは橋ならざる所なるが、瓜生島の中にも土地柔弱なる市街地浜辺等は数尺の低下を受け水に覆わるるに至りしも、岩石地及び堅硬なる台地は当時水上に存在せしならんと推察せらる。大分市威徳寺はもと瓜生島にあり、寛永17年現在の位置に建立せられたるものなるが、その由来記に「文禄5丙申年（即ち慶長元年）大地震動…潮水奔揚…瓜生島の屋宇若干は漂没して島八部は海となり。その後は島漸次崩れて海路となれり」とあり。前記の推論を確かむるものとす。尤もこの地震に際して、多少海底面にも昇降変動ありて津波を誘起せるものなるべく、現時の菡萏小島は或は瓜生島に属せしならんか。

（文献による 文責 早水逸雲）